

Title	人工心肺下体外循環中の血中補体活性化に関する臨床的検討
Author(s)	宮本, 裕治
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/35537
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名・(本籍)	宮 本 裕 治
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 7340 号
学位授与の日付	昭和 61 年 5 月 12 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	人工心肺下体外循環中の血中補体活性化に関する臨床的検討
論文審査委員	(主査) 教授 川島 康生
	(副査) 教授 中馬 一郎 教授 井上 公蔵

論文内容の要旨

[目的]

人工心肺下体外循環 (cardiopulmonary bypass : CPB) を用いた開心術において血中補体が活性化され、それによって放出されるアナフィラトキシンが術後の肺障害の誘因となり得ることが最近報告されている。しかし、この補体活性化のメカニズムについては未だ明らかにされておらず、これを明らかにすることはその病態生理を知り、ひいてはそれによる肺障害の予防を試みる上で有用であると思われる。そこで本研究では①CPB中の補体活性化のメカニズムをその活性化経路の面より調べると共に、②生体内での反応を肺における leukosequestration と補体との関連より検討した。

[対象および方法]

1984年7月より1985年8月までに当科において施行したCPB使用開心術のうち、21症例を対象とした。症例はすべて成人で年齢は28~71 (平均56) 才であり、疾患別症例数は、虚血性心疾患8人、弁膜症9人、その他4人であった。検体採取は、CPB開始直前と開始後10分、30分、60分、120分に人工肺の送血側より採血した。白血球数とその分画をただちに測定し、補体全体の活性を示す補体価 (CH50) をMayer変法で、各補体成分であるC4、C2、C3、C5の溶血活性を試験管法で、さらにC3およびC4の分解産物であるC3a (n=9) とC4a (n=10) をradio-immunoassayキットを用いて測定した。CH50、C4、C2、C3、C5、白血球数とその分画はCPB中の希釈による影響を除外するためにヘマトクリットを用いて補正し、補正值の前値に対する百分率を求めそれぞれを比較検討した。

肺における補体活性化と leukosequestration の検討は、肺動脈と左房より同時採血した試料の比較に

より行った。即ち心内操作終了し心室細動下に肺血流を再開し、数分後除細動を行いこの後数分して採血した。さらにCPB離脱後数分にも採血した。測定項目は、赤血球数、白血球数とその分画、血小板数、C3a、C4a、6-ケトプロスタグランディンF₁α (6-keto PGF₁α)、および血小板第4因子(PF-4)とした。

[結 果]

1. CPB中の各測定値の変動

- a. CH50 CPB開始後10分でCH50値はCPB開始前値の81±9%と有意 (P<0.01) に低下したが、それ以後は有意な変化は見られなかった。
- b. 各補体成分活性値 各補体成分ともCPB開始後10分でC4:81±7%, C2:84±8%, C3:83±9%, C5:86±8%とそれぞれ前値に比し有意 (P<0.01) に低下したが、以後は特に変化しなかった。
- c. C3a 前値192±120ng/mlに対しCPB開始後10分では443±224ng/mlと有意 (P<0.05) の増加を示したが、以後は有意の増加は見られなかった。
- d. C4a 前値342±146ng/mlに対しCPB開始後10分では529±138ng/mlと有意 (P<0.01) の増加を示したが、以後は有意の増加は見られなかった。
- e. 白血球数 白血球数の減少は見られず時間と共に有意 (P<0.01) に増加し、60分では前値の162±75%であった。

2. 肺循環再開後の肺動脈と左房の血液成分の比較

除細動後において、赤血球数と血小板数は、肺動脈と左房でほぼ同数であったが、白血球は肺動脈で7,940±3,740/mm³に対し左房では5,310±3,650/mm³と有意 (P<0.001) に左房で減少していた。白血球をさらにその分画で検討すると、PMNが有意 (P<0.001) に減少していたがPMN以外では有意の減少はみられなかった。

C3aは肺動脈で701±525ng/mlに対し左房で1,016±629ng/mlと左房で有意 (P<0.05) に増加していた。しかし、C4aでは差は見られなかった。6-keto PGF₁αは肺動脈で282±144pg/mlに対し左房で369±195pg/mlと左房で有意 (P<0.05) に増加していた。PF-4では両者間に有意差は見られなかった。CPB離脱後における肺動脈と左房の血液成分の比較では、全ての測定値が肺動脈と左房でほぼ同数であり両者間に有意差は見られなかった。またCPB開始後120分までは全ての測定値で人工肺の種類(気泡型、膜型)及び対象疾患による有意差は見られなかった。

[総 括]

- 1) CPBを用いた開心術中の補体活性化は、classical pathway及びalternative pathwayの両者を介するものであった。
- 2) CPB中の補体活性化は、CPBによるものに加えて生体肺によっても生じており、後者は主として肺循環再開後に生じた可能性が示唆された。
- 3) 生体肺での補体活性化は、alternative pathwayを介するものであることが示唆された。
- 4) 補体活性化に伴う生体内での反応として肺におけるleukosequestrationが示された。

論文の審査結果の要旨

開心術においては、人工心肺下体外循環を用いるため、人工肺及びその回路との接触により血中補体が活性化され、これが術後の肺障害の誘因となることが示されている。しかしこの補体活性化のメカニズムは未だ明らかでなく、これを明らかにすることは術後合併症を予防する上で有用である。本論文ではそのメカニズムを補体活性化経路の面より明らかにし、また人工心肺による補体活性化以外に、生体肺においてもこれが生じることが示された。この結果は今後この補体活性化を抑制し、手術成績を向上させる上で、非常に有用なもので、価値ある論文と考える。